

木育の10年を みつめて —木育 next 10



平成16年度に北海道で木育が生まれて、今年で10年の節目をむかえました。木育発祥の地「北海道の木育」の大きな特徴は、木育推進プロジェクトの検討から現在にいたるまで、行政と民間が木育を協働ですすめてきたことです。それぞれの立場と役割を尊重しながら、多くの事業や施策について「つながり」をもって活動してきました。

この10年をともに振り返り、木育のあらたなビジョンづくりのために「木育の10年をみつめて～木育 next 10」を開催します。皆様のご参加をお待ちしています。

◎日時

平成26年10月19日(日) 10:00～16:00 (開場9:30)

◎場所

北海道庁赤れんが庁舎2階1号会議室・前庭

札幌市中央区北3条西6丁目 TEL 011-231-4111

主催 北海道／木育ファミリー

後援 林野庁北海道森林管理局

◎協力

大沼流山牧場

大沼ふるさとの森づくりネットワーク

加賀谷木材株式会社

株式会社ハルキ

(株)GB産業化設計

てしかが自然学校

畠山尚デザイン制作室

北海道芸術デザイン専門学校

北海道森林インストラクター会

北海道林業木材産業対策協議会

むかわ町

木育マイスター道南支部

木育マイスター有志

KEM工房

NPO法人ねおす いぶり自然学校

(あいうえお順)



木育の10年をみつめて～木育next10

木育の10年を振り返り、木育のあらたなビジョンをつくる「木育の10年をみつめて～木育next10」が、10月19日（日）北海道庁赤れんが庁舎で開催されました。



主会場風景



木育関連の本

木材見本展示



グリーンウッドワーク展示

木育next10は、北海道と木育ファミリーの主催で、
総合司会：熊尾美香さん（水産林務部／木育ファミリー）
によりはじまりました。

◆ 午前の部（10：00～12：30）

オープニング 主催者挨拶 4

北海道水産林務部森林環境局長 濱田修弘
木育ファミリー代表運営委員 煙山泰子

第1部「木育10年のふりかえり」 5

濱田智子さん（木育推進プロジェクト・サブリーダー／北海道水産林務部）
煙山泰子さん（木育推進プロジェクト・公募道民／KEM工房）
岩井宏文さん（木育推進プロジェクト・事務局／(株)GB産業化設計）
進行：西川栄明さん（編集者、ライター）

第2部「木育をすすめる人」事例発表 7

北海道の木育マイスターについて 工藤森生さん（北海道水産林務部）
木育マイスター1期生 萩原寛暢さん（てしかが自然学校）
木育マイスター1期生 鈴木正樹さん（株式会社ハルキ）
木育マイスター3期生 桂 充子さん（北海道芸術デザイン専門学校）

◆ 昼の部（12：30～14：00）

木育カフェ「やってみよう木育！」 ・北のグリーンウッドワーク 11
・きぼうプロジェクト
・木育絵馬プロジェクト

◆ 午後の部（14：00～16：00）

第3部「木育～人と森や木と」事例発表 13

「コミもり」 上田 融さん（NPO法人ねおす いぶり自然学校）
「むかわ木育の学校」 太田耕司さん（むかわ町）

第4部「木育のこれからを考える」 16

参加全員で北海道の木育の可能性をさぐる意見交換会
ファシリテーター：宮本英樹さん
（木育プログラム等検討会議委員長／大沼流山牧場主）

クロージング「木育絵馬に想いをこめて」 19

2004年の台風18号で倒れた北大ポプラ材で作った絵馬掛けに
全員で木育絵馬を吊して祈願

「木育絵馬プロジェクト」と集まった木育宣言 20

木育10年の歩み(年表2004--2014) 22

木育の10年をみつめて～木育next10

木育の10年を振り返り、木育のあらたなビジョンをつくる「木育の10年をみつめて～木育next10」が、10月19日（日）北海道庁赤れんが庁舎で開催されました。



主会場風景



木育関連の本

木材見本展示



グリーンウッドワーク展示

木育next10は、北海道と木育ファミリーの主催で、
総司会：熊尾美香さん（水産林務部／木育ファミリー）
によりはじまりました。

主催者挨拶

北海道水産林務部森林局長 濱田修弘



皆さん、おはようございます。森林局長の濱田です。開会にあたり一言ご挨拶を申し上げます。今日は雲ひとつない快晴の中、木育ファミリーの皆さんと協働して、この集まりを開催できましたことをたいへん嬉しく感謝いたします。またこうして大勢の皆さんが本イベントにご参加をいただき、まことにありがとうございます。

木育という言葉はちょうど10年前に高橋はるみ知事が女性知事の会合の中で初めて発言された言葉でした。当時私は木材振興課という部署におりまして木材の利用拡大に取り組んでおりました。木育とも関係があり、個人的にも縁が深いプロジェクトとして関わってまいりました。

当初は木育は小さく生んで大きく育てば良いかなと思っておりましたが、私の予想を大きく上回って、木育はこの10年でほんとうに健やかに育ち、今では全国にも木育という考え方や言葉が広まっております。これも今日お集りの方々のそれぞれの取り組みやご努力によって、こういう形で大きく広まってきたと思っております。

本日は木育10年間のこれまでの取り組みを振り返って、また次の新しい未来へ向かって木育がどのように展開していけば良いのか、大いに皆さんと語り合っていきたいと思っております。それでは最後までどうぞよろしくお願いいたします。

木育ファミリー代表運営委員 煙山泰子



おはようございます、煙山です。今日は木育の10年をみつめて－木育ネクスト10に、こんなにも多くの方のご参加をいただきありがとうございます。

「木育」は平成16年度に北海道で生まれました。木育ファミリーは木育推進プロジェクトのメンバーの有志が集まって作った任意団体です。10年の年月を経て、今日ここに北海道とともに主催者として名前を連ねることができたことを、たいへん嬉しく、また誇りに思っています。

行政と民間ですから、木育のすすめ方にも当然違いがありますが、お互いの立場を尊重しながら協力してやってきたのが今の「北海道の木育」の姿です。私たち木育ファミリーは「木育」という名のもとに集まった家族のようなものだと思います。時間とともに人それぞれに立場や状況は変わりますが、いつまでも変わらないのはそれぞれの「木育によせる想い」です。それが家族の絆をつないできました。ここに来られない皆さんの想いも大切にしたいと思い「木育絵馬」を企画しました。みなさんの絵馬を読んでみると一人ひとりの思いが直に伝わってくるようで、感動します。それぞれの想いが「あれも木育、これも木育」として、これからも多様な木育活動の輪をひろげて行くことでしょう。

今日は短い時間ですが、木育の素敵さを実感できるように、いろいろなメニューをご用意しました。午前中は木育の10年を振り返りと木育マイスターについて。お昼の木育カフェでは、白樺の樹液コーヒーやホウの実茶を飲みながら、生木を加工する「グリーンウッドワーク」、東北への復興メッセージを届ける「きぼうプロジェクト」、「木育絵馬」をお楽しみください。木育を体感したあと、午後の部では、北海道の新しい動きと、これからの木育の可能性をみんなで考える場になればと思っています。

どうぞ最後まで、よろしくお願いいたします。

■ 第1部 「木育10年のふりかえり」

思い出の写真でたどる「木育の10年をみつめて」（5分ビデオ）を観たのち、西川栄明さんの進行で座談会がスタート。手もとに配られた「木育年表」を見ながら、当時の木育推進プロジェクトのメンバーが思い描いた「木育」が、どのように発展し現在に至ったのか、そして木育のこれからについて語りました。

左より、

西川栄明さん（編集者、ライター）：司会進行

濱田智子さん（木育プロジェクトサブリーダー／北海道水産林務部）

煙山泰子さん（木育プロジェクト公募道民／KEM 工房）

岩井宏文さん（木育プロジェクト事務局／(株)GB 産業化設計）





（西川）私は木育ファミリーのメンバーで、木工クラフトなどの本の編集や執筆をしています西川です。進行を努めますので、よろしくお願いします。

私は2008年に「木育の本」を煙山さんと共著で出版し、その後木育活動に関わってまいりましたが、2004年の木育プロジェクトのスタートには関わっておりません。今日はそのチームのメンバーで立ち上げに参加された三人の方から、木育の誕生からこれまで展開について、この10年を振り返ってお話を伺いたいと思います。では濱田さん、煙山さん、岩井さんをご紹介します。

（西川）では自己紹介を兼ねて、それぞれの関わりや取組みについてお話しいただきます。

（濱田）林業木材課の濱田です。私は水産林務部の職員で林業行政に携わっております。木育ファミリーのメンバーとして活動はしてきましたが、これまで木育を業務として担当したことは一度もありません。10年前は需要推進グループで木材の需要拡大の仕事を担当していました。その関係で木育プロジェクトチームの委員として参画させていただきました。当時木育プロジェクトのメンバーを同職員の中でも公募していて、私自身が木育に興味がありましたので応募して委員として入った次第です。

（煙山）煙山です。私は、20才の時からモノづくりをKEM工房においてずっと一人でやってきましたが、社会的な活動がしたいと思い、50才の時に

メンバーになりました。じつは私は一般公募道民として申込んで、その際木育への思いを作文にめんどろと書いたおかげでメンバーに選んでいただきました。

（岩井）岩井です。最近は皆さんにお会いする機会が少なくなりましたが、当時（平成16年）私はドーコンという建設コンサルタント会社に勤めていまして街づくり計画部に所属していました。その時に道庁の地域計画部に2年間出向することになり、たまたまそこで木育プロジェクトと出会い、それがきっかけで今の会社を自分で立ち上げた次第です。

（西川）それでは次に、まずそもそも木育を立ち上げようと言う経緯について当時の関係者である濱田さんから雰囲気をお話いただけますか。

（濱田）最初に提案した木材振興課では、「植えて育てて、切ってまた植える」という当時の林業の在り方に対して、これからはもっと「切って使って」という視点から見直し、一般の人々の理解を広めようという動きのひとつが、木育につながったと思います。

（西川）その時点ではまだ木育という言葉は生まれていなかったのですね。

（岩井）そうです。当時、地域計画の柱に協働型政策検討システムという事業がありまして、道庁内の各部署から新しい取組みテーマの提案を募り、十数個のプロジェクトに絞られました。そのひとつが木材振興課から出された広がりのある提案でした。その時は木育ではなく、確かウッドスタートといったニュアンスでした。でもウッドスタートですと、赤ちゃんが木に触れるという意味から、その将来的な活動の広がりに限界がある。理念と趣旨の幅広さと今後の運動の広がりを考えると、もっと大きな枠組

みを表現する言葉があるはず、それは何かを徹底的に関係者で議論しました。そして自然、環境、産業、世代、教育などの観点から、北海道の森林や木材の将来を形づくるキーワードを搜しました。

その中から生まれたのが「木育」という言葉でした。当時すでに「食育」が市民権をえていたので、その連想からも木育という言葉がもつ川上から川下までの大きな広がり理解されやすいということもあったと思います。

（西川）「木育」という言葉とその活動が生まれるにはそうした議論があったのですね。今では全国に広まっている「木育」という概念は、10年前に初めて北海道で生まれたことをあらためて認識しました。その後、その協働型政策プロジェクトとして木育はどのように進められましたか。

（岩井）協働型プロジェクトのテーマのひとつは「木育」という事で決定して、知事まで上げました。次にプロジェクトチームのメンバーを、協働にふさわしく広がりを持つようにどのように構成するかが大きなポイントでした。メンバーの顔ぶれをみると、改めてその多様なメンバー構成に驚く程です。それが今日の木育活動の幅広さに繋がっていることを実感します。

（西川）ではそのプロジェクトチームでの議論について、振り返っていただけますか。

（煙山）第1回プロジェクト会議が開かれたのは忘れもしない2002年9月、台風19号で北大のポプラ並木が倒れた2日前でした。リーダーは今亡き北大名誉教授の辻井達一先生でした。メンバーも緑系（自然森林系）と茶系（林業木材系）とその他（教育子育系）など幅広く、それぞれ勝手に自分の意見を述べるゴツ煮のような会議でした。

（濱田）それで事務局からは「木育という言葉に、魂をこめてください」と要望が出されました。

（岩井）その後メーリングリストを作って意見交換を行えるようにしましたが、時には1日100通位のメールが送られる程、熱い議論が続きました。

（西川）半年間に10回程の会議や視察と何千通のメールのやり取りを整理して、木育の魂とその目指すものが次第に明確になっていったと言うことですね。報告書にまとめられるのは大変でしたね。

（岩井）キーワードを整理する作業を通して、ほんとうに時間をかけて基本理念をまとめました。

（煙山）もの凄く濃い時間だったので、これで終わりたいと思ったなど、臨場感のある本音の話ができました。それで報告書にまとめたあともメンバ

ーの熱い繋がりを残したいということから木育ファミリーが生まれました。

（西川）今の木育は10年前の木育プロジェクトで話し合い思い描いた通りに展開していますか、それとも少し違った方向あるいは予想以上の展開になっているのか。それはよい方向でしょうか？

その後、道外でも「木育」の活動が始まり、林野庁は「木材産業の体制整備」「国産材利用拡大」を推進しています。北海道の木育の考え方とはポイントの置き方が異なるところもありますが、北海道の木育とは、その推進の特長は？

（3人発言要約）木育の全国的な広がりを大きく評価しているとのこと。しかし木育が、こどもを対象とする「木のおもちゃの普及活動」や単なる「木づかい運動」と見られがちな風潮には残念な思いがある様子。北海道の木育は「協働」「つながり」がキーワードで、活動の特徴には場所（地域）や人（対象）に応じた多様性があげられる。私たちのめざす木育推進スタイルは「あれも木育、これも木育」が基本であることを改めて確認しました。

（西川）これからの木育に期待すること、次の10年にやりたいことは？

（岩井）自発的に地域に広がる木育のチカラを感じている。他の分野との「つながり」にも期待し、自分の仕事にもつなげたい。

（煙山）いままで木育に関わりのなかった人たちに、「きれいになる木育」「おいしい木育」などの新しい視点でやってみたい

（濱田）これからの10年も林務行政に携わりながら、将来の個人的プランに夢をつなげていきたい



最後は、西川さんより木育の理念「木とふれあい、木に学び、木と生きる」の意味をそれぞれが再認識してほしいとの言葉があり、田中淳夫さん（森林ジャーナリスト）の新刊『森と日本人の1500年』に北海道の木育が取り上げられていることが紹介されました。

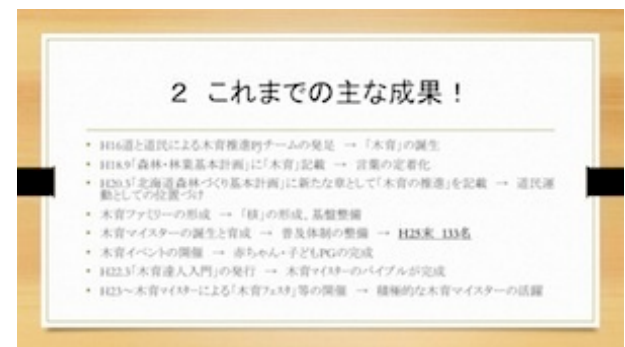
■ 第2部 「木育をすすめる人」

平成22年から始まった北海道の人材育成事業「木育マイスター」の概要を説明した後、3名の木育マイスターがそれぞれの活動報告をしました。

● 工藤森生さん（北海道水産林務部）



工藤森生さんは、これまで北海道が行ってきた木育事業と木育マイスターの新たな動きや期待について話しました。人材育成に関しては「明確な理念があること」「それぞれの特性をいかして自由な活動ができること」が重要で、木育マイスターはそれを実現できる可能性を持っているので頑張してほしいとのエールが送られました。



● 萩原寛暢さん（てしかが自然学校）

木育マイスター1期生の萩原寛暢さんは子ども達が地域での自然の中でいろいろな体験を重ね、木と自分達の暮らしの結びつきに気づいてほしい、弟子屈の小学校や町の事業「原野のもりの木育ひろば」などの木育活動を報告しました。





森のお仕事見学



地域資料の見学



小学校の木育教室



広報てしかが紹介記事

● 鈴木正樹さん（株式会社ハルキ）

木育マスター1期生の鈴木正樹さんは、道南の森町にある木材メーカーで働きながら「作る」「遊ぶ」をテーマに木育活動をしています。H25年からは、木育マスター道南支部を設立して「木育フェスタ」などの事業を開催。今年は仕事で、函館空港の木質化も手がけたとのこと。

